ノンフィクションとしての「故郷」

田村　容子

梁鴻著／鈴木将久 河村昌子 杉村安幾子訳
中国はここにある
貧しき人々のむれ

四六判　312頁
みすず書房
［本体 3,600円 + 税］

本書は、中国人民大学文学院教授であり、中国文学を専門とする梁鴻氏が、河南省にある自身の故郷をモデルとする農村についてつづった文学作品である。本書のもとになる原著「梁莊」は、雑誌『人民文学』二〇一〇年第九期に、「非虚構（ノンフィクション）」として発表された。中国文学におけるノンフィクションとはなにか、梁鴻氏にとってのノンフィクションとはいかなるものかについては、本書の「訳者あとがき」に詳しいので参照されたい。ここではひとまず、ノンフィクションとは中国において、二〇一〇年より勢いが盛んになったジャンルであり、それは文学が政治に奉仕するものであった時代に書かれた「報告文学（ルポルタージュ）」のように、政治的な「正しさ」にもとづく取材者の記録とは異なるものであることを確認しておきたい。

知識人の帰郷を描く文学作品といえば、魯迅の「故郷」を思い浮かべる人は多いだろう。だが、本書は魯迅の「故郷」をふまえながらも、農村の人びとの複雑な語りを再現するスタイルをとる。その叙述は、文学作品である以上、著者による表現の操作が入り込むことは避けられない。しかし、はじめから叙述の方向性の定まった語り手に導かれるフィクションやルポルタージュとは、一線を画すものである。

本書を手に取ったのは二〇一八年一〇月、台南大学での会議に向かう直前のことだった。タイトルにひかれ、読み始めたらとまらなくなってしまったものの、すでにスーツケースは資料でいっぱいだ。読みかけの本を持っていくことは断念し、あわてて電子書籍版を購入して端末にダウンロードした。おかげで台南に着くまでの、飛行機と高速鉄道で過ごした時

間の感覚はおぼろげである。その間ずっと夢中で本書を読みつづけ、途中で胸が苦しくなるとしばし景色を眺め、それからまたつづきに没頭する……の繰り返しだったからである。

台南大学での会議は演劇に関するものだったが、北京から参加された李亦男氏（中央戯劇学院教授）の報告を拝聴し、すぐにこの本のことが頭に浮かんだ。その報告は、中央戯劇学院戯劇文学系の学生たちと李氏が、都市の中で周縁的な立場におかれている人びとや社会の問題に目を向け、それらに取材したドキュメンタリー演劇を創作する過程を省みる内容であった。

李氏の報告を聞いて、たとえば再開発の進む路地の住民に話を聞いたり、出稼ぎ労働者が住む北京郊外の村でさまざまな「音」を採集したりするといったドキュメンタリー的手法を用い、いま自分たちが生きている社会の姿をとらえようとする関心のあり方が、本書と共通しているように思えた。とくに、その目的が社会問題の告発などなんらかの課題のもとにあるのではなく、梁鴻氏の言葉を借りれば、「自分のアプリオリな観念を捨て去りたい」と、思考の枠組みを再構築しようとする点におかれているところが、とても新鮮であった。先に述べた通り、原著の初出は二〇一〇年であるが、この良質なノンフィクションに見られる関心のあり方は、その後の中国の文芸において、さらなる普遍性をもつようになったのかもしれないと感じられた。

もっとも、本書の訳者である鈴木将久氏・河村昌子氏・杉村安幾子氏は、そのような動向にいち早く注目し、日本語で紹介すべく尽力されてきたといえるだろう。この三名のチームによる先行する翻訳書に、『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか――女性キャスターの苦悩と挑戦』（平凡社、二〇一四年）がある。著者の柴静氏は、元中国中央テレビ局キャスターをつとめたジャーナリストで、同書は彼女の取材した社会問題についてまとめられたものである。原著は二〇一三年の中国のベストセラーであり、二〇〇〇年代以降、中国社会に衝撃を与えたさまざまな事件が、取材者である柴静氏の視点から叙述される。

その中で独特の余韻を残すのは、「訳者解説」でも取り上げられている、「無能の力」という章である。広西チワン族自治区の農村で教育ボランティアをするドイツ人の青年を訪ねた柴静氏は、彼との対話の中で、「目的」をもった自身の取材の姿勢を見直さざるを得なくなる。同書は、中国の社会問題にメディアの内側から切り込む内容が興味深いのだが、それ以上に、柴静氏がしばしば自らの言葉、たとえば取材相手にかけた一言や、番組内のコメントを振り返り、その表現が適切だったのかどうかを吟味する過程が、筆者には印象深かった。

同様に、本書『中国はここにある』でもっとも心ひかれたのは、語り手であり、自らの故郷の観察者でもある著者が、「彼女たちにとって、また私自身にとっても、私はすでに農村の外部の人間だった」と述べ、「彼らの人生、彼らの生命のありさまを、社会へと安易に帰結させたくない」という姿勢を堅持している点である。そのため梁鴻氏は、わざわざフィールドワークのために故郷に戻り、五か月近く生活したにもかかわらず、「目的」をもって取材相手の話を聞くことにためらいを見せる。

たとえば、「第三章　子供を救え」では、高校生の少年が老婆を殺害し、強姦したという農村を震撼させた事件について触れられる。梁鴻氏は殺人犯となった少年に会う機会を得たものの、彼にかけるべき言葉を見つけられない。この章では、著者の通った小学校が養豚場となり、かつて村にあった文化的雰囲気が失われ、この少年のように出稼ぎに行った親に取り残された「留守児童」が増えつづける現実が描かれる。一九八〇年代中期、村の教育に活気があった時代に恩恵を受けた知識人である著者が、それがもう二度と取り戻せないことを実感する場面は、ある意味で少年の犯罪よりも痛ましい。少年を前にした梁鴻氏は、「すべての原因は原因でない、すべての原因でない要素が組み合わさって最終的な悲劇になった」との感慨を抱く。こうした叙述に、衝撃的な事件をもって農村の荒廃を代表させるのではなく、より複合的な視点から農村をとらえ、また自身には踏み込めない農村内部の領域があることを認識する著者の態度があらわれているといえるだろう。

「私は自分の優越感と、都市と田舎の生活の違いから来るある種の嫌悪感を拭い去ることができなかった」と述べられるように、梁鴻氏は自身の農村への戸惑いを隠さない。そうした著者と故郷との距離感を絶妙に描き出しているのが、「第四章　故郷を離れる若者たち」に登場する、少女時代の親友・菊秀のエピソードである。

菊秀と霞子、そして梁鴻氏は、中学時代の「仲良し三人娘」であったが、菊秀だけが高校進学に失敗した。それぞれに子供を連れて再会した三人は、かつて一緒に歩いた川岸の道をふたたび散歩する。夢破れた菊秀の、「今になって思うんだけど、世の中でいちばん悪いモノって理想よね。だって、ちっぽけな理想なんか守ろうとしなければ、私、こんなひどい暮らしなんてしてなかったんじゃないかな?」という言葉は重い。「瞬間的にさっと私をかすめた目つきには、いやというほど屈辱を被って暮らしている菊秀の苦痛が見てとれた」という著者の観察眼は冷徹だが、過ぎ去った学生時代の風景と、そこ

で過ごした友人たちとの時間を懐かしむ筆致はあたたかい。

著者は菊秀のことを、やがて忘れられる「懐かしの道」と重ね合わせて描いているが、こうした「忘れられた」人びとの丹念な描写と語りの再現が、本書を魅力的なノンフィクションたらしめているといえるだろう。それらの人びとの言葉を聞くため、梁鴻氏はしばしば軽い世間話からコミュニケーションを始める。また、相手が雄弁に語る言葉をもたない人物である場合、たとえば「第七章　「新道徳」の憂い」に登場する巧玉のような女性については、その「ふたつの大きな手」や「いつもどうしていいかわからず緊張している」様子など、風貌や表情が細かく描写される。農村の人びとが著者に見せるふるまいが、一つ一つ丁寧に記されることによって、読者は自然に脳裡に彼らの像を結ぶことができるだろう。

「第五章　大人になった閏土（ルントー）」には、魯迅の「故郷」において、語り手と再会する幼馴染みの「閏土」のごとき人物が登場する。この章では、墓地に住む昆生という老人への観察を通して、梁鴻氏は次のように思いいたる。

> 農村では、昆生のような人は、すでに正常な道徳体系や生存体系の外側に排除されているのだ。彼らの存在は、その村が非人道的であることを象徴しているのではなく、逆なのだ。彼らが世間と隔絶しているゆえに、彼らが愚かで奇異であるがゆえに、彼らは村の道徳面の汚点になっており、嘲笑され、排除される「モンスター」とされているのだ。庇護や世話や援助など、到底受けられるはずもない。私たちの文化において「生命」それ自体、「人間」自身には、なんら値打ちなどないのだ。同じ文化共同体の中で価値に相応するものを見つけない限り、尊重と肯定は与えられないのだ。

この分析は、中国の農村社会の一面を、端的に言い当てているのではないだろうか。本書を通読すると、ここで述べられる農村における「道徳体系」や「生存体系」の輪郭をおおよそつかむことができるが、それらは魯迅の物語世界から、それほど隔たってはいないようにも思える。

魯迅の「故郷」は、ふるさとに別れを告げる物語であった。本書もまた、末尾において、故郷への決別ともとれる思いが語られる。子供のころに母を失った著者にとって、母の墓は全篇を通して故郷を象徴する存在として描かれている。帰郷した梁鴻氏はまず墓参りをし、取材の過程で折にふれ、母と家族の歴史を思い起こす。そしてふたたび故郷を離れるとき、もう一度母の墓を訪れ、「この数か月、機微にまで分け入る

分析と発掘をしたことで、私の心の中の故郷は、まったく変わってしまった」と吐露する。

邦題の『中国はここにある』は、原著にある架空の地名「梁荘」をさらに抽象化したことで、ノンフィクションであり、文学作品でもある本書の性格がより伝わりやすいものになっている。本書には関連動画「梁鴻的梁荘」シリーズがあり、翻訳で読んでも十分におもしろい人びとの語りを聞いてみたくて視聴したが、ドキュメンタリーとして味わうには、現実の故郷を紹介する梁鴻氏の言葉が饒舌すぎるように感じ、それほど入り込めなかった。

一方、この本が心の琴線に触れるのは、文学として書くという著者の意識がすみずみまで行き渡っているせいだろう。登場する人びとは、梁鴻氏の創造物でありながら完全なる創造物とはいえず、著者は自らの父を語るときですら、その内面に踏み込まない。そうした対象と距離をとった叙述から見えてくる、人びとの断片的な生活の集積は、まさに「中国はここにある」と言いたくなる臨場感を放っている。そこにあらわれるのはまぎれもない農村の現実であるが、その現実をいかにとらえ、叙述するかという著者が自らに課した問いの部分こそが、読み手の「中国」観をゆさぶるのである。

（たむら・ようこ　金城学院大学）

展覧会のご案内

マッチ――魔法の着火具・モダンなラベル

会期：五月二五日（土）～七月七日（日）※月曜は休館
会場：たばこと塩の博物館（都営浅草線 本所吾妻橋駅から徒歩10分）
開館時間：10時～18時（入館は17時半まで）
観覧料：大人・大学生　一〇〇円　小・中・高校生・満65歳以上　五〇円　※満65歳以上は要証明書。
みどころ：本展では、戦前日本の重要輸出品マッチのあゆみを、マッチ工場の写真や多彩なマッチラベルから紹介する。ラベルには、最大の輸出先だった中国の吉祥図案が多く用いられた。
関連講演会：六月三〇日（日）14時～、三山陵「中国庶民の吉祥画～マッチ図案の一源流～」当日開館時より整理券を配布。
お問い合わせ：03-3622-8801

中国風図案の輸出用マッチラベル